

「きっかけ」

甲斐てつろう

登場人物

清水舞花

(16)

北海道の高校2年生。

森脇健

(16)

少し変わった高校2年生。

新垣隼也

(16)

舞花の彼氏の高校2年生。

牧師

(45)

高校に勤務している牧師。

健父

(46)

健の父。

男友達

(16)

隼也の友達の高校2年生。

女友達

(16)

舞花の友達の高校2年生。

舞花母

(35)

舞花の母。

舞花父

(39)

舞花の父。

担任

(32)

舞花たちの担任の数学教師。

隼也母

(34)

隼也の母。

英語教師

(53)

高校の女性英語教師。

○通学路・（朝）

秋の北海道の道。

清水舞花（16）と新垣隼也（16）、

そして男友達（16）と女友達（16）

が登校していた。

隼也「今日は練習見にくるの？」

舞花「うん、お父さんも遅いから」

男友達「試合近いもんな」

女友達「彼女が居たら練習捗るんじゃない？」

隼也「うるせーよ」

そこにぶつかって来る森脇健（16）、

突き飛ばされてしまう舞花。

舞花「いたた……」

隼也「大丈夫か、おい謝れよ！」

隼也、そのまま去ろうとする健に怒る。

健「あっ、す、すいませっ……」

健、焦るようにすぐ行ってしまう。

隼也、鼻を押さえる。

隼也「うわ今凄い臭かった、アイツまた風呂入ってないな」

舞花、走り去る健を目で追っていた。

○高校・外観・（朝）

キリスト教を信仰する私立の高校。

壁には十字架の飾りがあった。

○高校・体育館・（朝）

キリスト教の高校であるため月曜日の
礼拝が行われていた。

牧師（45）、壇上に立つ。

牧師「今週の学業にも主イエス・キリスト
の恵みがあらん事を」

殆どの生徒、眠そうに聞いている。

健、チックが抑えられない。

健「んっ、んあっ……」

声を出し体も動いているため周囲は迷
惑に思っている。

○同・教室・（朝）

男性の担任（32）、数学の授業を行っている。

担任「そこでここでこの式を……」

担任、ペンを消しゴムに叩きつける音を聞いて話を止める。

担任「はあ……」

健が数学とは違うノートに何か書きながらペンを消しゴムに何度も叩きつけている。

健「んんー」

皆、その音に迷惑していた。

担任、健の席に近付く。

担任「おい、今は数学の時間だぞ？　おい！」

健、大きな声を出されて気づく。

健「す、すいませんっ……」

しかし健、全く手を止めない。

皆それに迷惑していた。

○同・教室

放課後の掃除の時間。

健、まだノートに書き続ける。

隼也「おい机動かせ、邪魔なんだよ」

当番の隼也、健に迫る。

舞花、その様子を見ていた。

健「待って、もう少し……」

健、それでも書き続けるため隼也はキレた。

隼也「お前な！ みんなさっきから迷惑してんだ！」

隼也、そう言ってノートを奪い取る。

そのまま書かれた内容を読み上げた。

隼也「どれどれ……『今日は試合の日。舞花

さんがお弁当を作ってくれた』何だこれ、

全部ウソじゃねえか！」

男友達「妄想日記だなこりゃ！」

女友達「ウケるー！」

隼也たち、大笑いする。

舞花は笑っていない。

健、顔を真っ赤にしている。

隼也「舞花、弁当作ってやったのか？」

舞花「そんな訳ないじゃん」

隼也「だよな、ははは」

健「ううっ！」

健、恥ずかしくて教室を飛び出す。

隼也、健のノートをゴミ箱へ。

隼也「舞花は俺の彼女だったの」

一同、掃除を終わらせて帰宅。

舞花、ゴミ箱のノートが気になった。

○同・グラウンド・

舞花、隼也のサッカー部の練習を見る。

舞花「頑張ってー！」

隼也、見事に得点を入れる。

女友達「これなら今度の試合も勝てるね」

舞花、こんな時間に玄関から健が出て

来るのを見つけるが無視した。

○通学路・

舞花と隼也、そして友人たち、途中で
で一緒に帰る。

舞花、一步引いている。

隼也、男友達と女友達の肩に手を回して喋る。

舞花、羨望の眼差しで見ていた。

隼也「点決めたの見た？」

女友達「見てたよー、カッコよすぎだった！」

男友達「今度は止めるからなー」

舞花「あの……」

男友達「てかさ、あのフェイントはズリい

よ！」

舞花、話そうとするが遮られる。

隼也、舞花の様子に気付いた。

隼也「舞花は見てくれたか？」

舞花「見てたよ」

隼也「どうだった？」

舞花「うん、カッコよかったよ」

隼也「よっしゃ！ いいところ見せれたぜ！」

隼也、喜び走り出す。

女友達「待ってー」

男友達と女友達、隼也に着いて走り出

す。

舞花、三人を無表情で見ていた。

×

×

×

女友達「じゃあねー」

男友達と女友達、分かれ道で隼也と舞

花と別れる。

隼也と舞花、二人で帰る。

隼也「なあ、今日俺ん家来ねえ？ 最近ご無

沙汰だったしシュート決めたご褒美にさ：

：

隼也、舞花の手を握り顔を近づける。

舞花、拒絶し手を放す。

舞花「今日はダメだよ、お父さん早いから準

備しとかないと……」

隼也、明確に不機嫌になる。

隼也「また親父かよ。何でお前があんな奴の

ご機嫌取りしなきゃなんねえ？」

舞花「だってお母さんだけじゃ間に合わない

し、お母さんも大変そうだし……」

隼也「飯用意してねえ位でキレル奴とは別れ

ろって言えよ」

舞花「そんな簡単な話じゃないよ……」

舞花と隼也、距離が空く。

○団地・舞花の家・（夜）

舞花、舞花母（35）と夕食を作る。

舞花母「宿題はいいの……？」

舞花「そうだ、結構ある」

舞花母「こっちは良いからやっちゃいなさい」

舞花、鞆から宿題を出し取り組む。

舞花父（39）、酒を片手に帰宅する。

舞花父「おいまだ飯出来てねえのかよ」

舞花母「今出来るから、大声出さないで」

舞花母、舞花父の帰宅に不満。

舞花父「舞花は宿題か？ どれどれ」

舞花父、舞花の鞆から出ていたノートを拾うがそれは持ち帰った健のだった。

舞花「あ、それ……」

舞花父「んだよお前のじゃねーじゃん」

舞花父、ノートを読み上げる。

舞花父「『今日の練習も舞花さんが見に来てくれた、捗った』おいおい日記使った告白かよおい！」

舞花「やめてよ……」

舞花父「で、付き合うのか？　でも字が汚ねえな」

舞花、恥ずかしくなる。

× × ×

舞花父、先に就寝する。

舞花母、洗い物をしながら舞花に問う。

舞花母「もうあの人から逃げたい、実家帰るって言ったら舞花は着いてきてくれる？」

舞花「うーん、どうしようかな……」

舞花母「何悩んでるの、アンタ友達いるの？」

舞花「一応いるよ、今日もサッカー部の活動

見て来たし……」

舞花母「サッカー部なんてアンタ全然そんなガラじゃないじゃない、無理して付き合ってたんじゃないの？」

舞花「それは……関係ないでしょ」

舞花、自室に入る。

○同・舞花の部屋・（夜）

舞花、健のノートを覗いてみる。

舞花「『今日は雨だったのに傘を持ってなかった。でも舞花さんが同じ傘に入れてくれた』『舞花さんと一緒に牧師さんの所へ行った。でも神様は信じないぞ』」

舞花、そっとノートを閉じる。

舞花「キモ」

○高校・廊下・（日替わり朝）

舞花、健にノートを返す。

舞花「はいこれ。隼也はいつもあんな感じだから、気にしない方がいい」

健「あ、ありがとう……」

舞花「アイツら弱い奴には強く当たるからさ、嫌なヤツらだよ」

健「ええ……」

舞花「それじゃ」

健、去る舞花の背中を見つめていた。

その顔は赤かった。

○同・教室・

英語教師（53）、生徒に指示を出す。

英語教師「じゃあグループを作ってやり取り
をしてみましよう」

舞花、隼也とグループを組もうとする
が健に話し掛けられる。

健「あのっ、一緒に組みませんか？」

舞花「ええ……？」

隼也「あのな、舞花は俺と組むんだよ。何で

お前なんかと」

舞花と隼也、離れようとする。

健、追い掛けた。

健「じゃあ次の番でも良いからっ」

舞花、無視した。

○同・教室・

昼休み、舞花は隼也達と弁当を広げる。

健、そこに乱入する。

健「あのっ……お、俺も一緒にっ」

健、舞花の弁当を見て目を見張る。

健「わぁ、これ自分で……？」

しかし無視されて健の席は開けられなかった。

女友達「何コイツ」

女友達、あざ笑う。

健、その場から離れた。

○同・廊下・

舞花、友人たちと隼也の部活を見に行こうとすると健に話し掛けられる。

健「このあと牧師さんの所に行くんだけどよ

ければどうですっ？ 神様は信じてない

けど牧師さん良い人だからっ……」

隼也、舞花の代わりに叱る。

隼也「おいしっこいぞ」

健「え……」

隼也「舞花嫌がってるだろ、嫌がる事すんじ

やねえよ」

隼也、舞花の肩に手を回し去る。

○同・階段踊り場・

舞花、隼也の部活の休憩中に階段の踊り場で会話していた。

隼也「なあ流石に試合後までお預けはしんどいぜ？」

舞花「ええ、今日もダメだよ……？」

隼也「でもこのままじゃ試合に影響出ちゃう、せめて手でさ？」

隼也、舞花に迫る。

舞花「ちょっと、やめてよ学校だよっ？」

隼也「大丈夫だよ誰も来ねえって……」

舞花「いやっ……」

健、たまたま階段を昇って来る。

健「え……？」

健、舞花が嫌がっているのを見る。

健「そ、そっちが嫌がる事するなって言ったんじゃないか……！」

健、舞花を助けようと隼也に掴みかかる。

隼也「おい離せって……っ」

隼也、抵抗して健を叩いてしまう。

健「痛っ……や、やめろお！」

健、反射的に反撃してしまう。

隼也を思い切り突き飛ばした。

隼也「うわあああっ」

隼也、階段から転げ落ちる。

舞花「隼也！」

隼也、足が変な方向に曲がっていた。

○同・生徒指導室・（夜）

学校に親を呼ばれる。

舞花母、健父（46）が話を聞く。

担任「いくら舞花さんが嫌がる事をしてたと

はいえ階段から落とすのはやりすぎです。

現に足が折れて少しの間入院する事になっ

たんですから」

担任、健の普段の様子も伝える。

担任「息子さんは普段から不真面目な様子が目立ちます、流石にこれ以上は見過ごせませんよ？」

健父「本当に申し訳ありません、息子も頑張っていますのでどうか……！」

舞花、興味なさそうに聞いている母を横目で見ていた。

○同・廊下・（夜）

舞花、舞花母と帰ろうとすると健と健父に呼び止められる。

健父「今日は申し訳ありません、息子も反省していますので……っ」

健「ご、ごめんなさい……」

舞花母、不機嫌そうにしていたため舞

花は先に戻らせる。

舞花「先に車戻ってて」

舞花母「うん」

舞花、母が戻ったのを確認し健に話す。

舞花「隼也ね、もうすぐ大事な試合だったの」

健「う、うん……」

舞花「私も応援してたのにね……」

健、罪悪感が顔に出ている。

舞花「まああのままあそこでされるのは嫌だったし、助けてくれたのは分かってる」

健「え？」

舞花「私のこと好きならさ、もっと見合うように努力しなよ」

健、顔を真っ赤に染め上げる。

舞花「その無駄に長い髪切りな。髭もちゃんと剃ってもっと綺麗にできてよ」

舞花、突き放すようにそれだけ言うて去る。

健、父に尋ねた。

健「父さん、床屋さん行きたい」

健父「はは、やっとか」

○団地・舞花の家・（夜）

舞花と舞花母、帰宅するが舞花父が怒る。

舞花父「こんな時間までどこ行ってた！」

舞花母「舞花の学校よ、大声出さないで壁薄

いんだから……」

舞花父「腹減ったんだよ、遅くなるなら連絡
くらいしろよな？」

舞花父、舞花に迫る。

舞花父「んで何やらかしたんだ？」

舞花「いいでしょ別に……」

舞花父「ちっ、反抗的になりやがって」

舞花父、そのまま風呂に入った。

舞花母、愚痴を言う。

舞花母「何なの、疲れてるからって私らに当
たらないでよねっ」

舞花母、小声で言う。

舞花母「絶対離婚してやる、こんなヤツっ」

舞花、そんな母を見ていた。

○高校・教室・（日替わり朝）

舞花、教室で隼也の話題を聞いていた。
女友達「隼也ケガしたってマジ？ 試合どう

すんの？」

男友達「アイツ何やってんだよ……」

クラス中で健へのヘイトが高まる。

健、そこで教室に入る。

健「お、おはよう舞花さん……！」

舞花、髪を切り髭を剃った小綺麗な健を見て驚く。

舞花「おはよ……？」

健、満足そうに席につく。

担任、教室に入るなり驚いた。

担任「おお何か爽やかだな……」

×

×

×

朝のホームルームが終わる。

舞花、健の悪口を聞く。

女友達「何なのアイツ、隼也に酷い事した途端に爽やかになってさ？」

健、そこで舞花の所へ。

健「どうですか、言われた通りにしたんですけど……」

舞花「ちよっとっ」

女友達「え、舞花が言ったの？」

舞花「いや、アドバイスっていうか……」

健、舞花の反応を待っている。

舞花「似合ってるんじゃない……？」

健「やった！」

健、スキップで自分の机に戻る。

舞花、溜息を吐いた。

○同・教室・（朝）

担任、数学の授業を行う。

健、チックを出しながら妄想日記を書きペンを何度も叩きつける。

健「んっ、んあーんっ」

担任「また関係ない事してるのか……？」

舞花、皆がイライラしているのを感じ健を止めた。

舞花「ねえ、ちゃんと授業聞きな？ あとペン叩く音うるさいよ」

健「あつ、ごめんなさいっ……」

健、舞花に注意されすぐにやめた。

数学のノートと教科書を取り出す。

担任「お前どうして……？」

一同、舞花に驚いていた。

しかし舞花、恥ずかしい。

○同・教室・

舞花、何故か健と隣で弁当を食べる。

健、口に物を詰めたまま喋る。

健「昨日父さんと慌ててまだやってる床屋さん探してっ、安かったけど……」

舞花「食べながら喋るのやめて」

健「あっ、んっ……ごめんなさいっ」

健、飲み込んでから謝る。

舞花、溜息を吐いた。

× × ×

健、別の授業では手を挙げた。

健「えっと、答えは4番です……！」

英語教師「答えは違いますけど珍しいですね」

教室にいる一同は驚いていた。

× × ×

そして帰りの会の直前。

女友達、舞花に提案する。

女友達「ねえ舞花、しばらくアイツの担当になれば？」

舞花「どういう事？」

女友達「アイツ舞花の言う事なら聞くじゃん、隼也が退院するまでで良いからアイツの面倒見てやりなよ」

舞花「えー、何で私が……」

担任、教室に入る。

担任「んじゃ席につけー」

女友達「せんせー！」

担任「ん、何だ？」

女友達「舞花がコイツの面倒見たいって！」

女友達、健を指して言う。

舞花「ちよつと勝手に……！」

担任「確かに今日一日調子よかったからなあ」

担任、少し考えてから舞花と健に問う。

担任「お前らはそれでいいのか？」

舞花は考えるが健は即答した。

健「はい！」

舞花、健のキラキラした目を見て選択を迫られる。

舞花「はぁー、分かりましたよ！」

健、嬉しそうな顔を浮かべる。

舞花は不安な表情を浮かべていた。

○同・カウンセリング室・

舞花と健、牧師と話す。

牧師「健係ねー、いいじゃない人と関わる機会が出来て」

健「う、うん……」

健、恥ずかしそうにしている。

牧師「この子、他人が苦手だから練習相手になってあげて」

舞花「はい……」

健「でもまだ他の人は怖いよ、今日も俺のこ

舞花さんに押し付けて嬉しそうにしてた」

牧師「聖書にも書いてあるでしょ『敵を愛し迫害する者のために祈りなさい』って」

健「また聖書の話、俺は信じてないからね」

牧師「無理に理解する必要はないよ、いつか自然に理解できる日が来るさ」

牧師、舞花を気遣う。

牧師「ごめんね置いてけぼりにしちゃって」

舞花「いえ……」

牧師「前の学校で虐められてね、お父さんの友達の僕がいるここに転校させて面倒見る事にしたんだ」

舞花「そうなんですね……」

牧師「でもやっぱり人が怖いみたいで。日記を返してくれた君なら上手くやれると思うたみたい」

牧師、舞花にお願いをする。

牧師「大変かもしれないけど仲良くしてやってくれると嬉しい」

舞花「はい、頑張ります……」

舞花、断り切れなかった。

舞花「ねえ、その妄想日記は何なの？」

健「えっと、俺の理想で……これをモチベ―

シヨンに人間関係頑張ろうとして」

舞花「何で優しくする前から私出てんの？」

健、顔を赤くする。

牧師、ニヤニヤしていた。

牧師「ホラ、言っただらん？」

健「実はっ、舞花さん達のグループに憧れて」

舞花「はあ？ 私らのどこに？」

健「キラキラしてた。サッカー頑張ってた応援してもらって……楽しそうにしてた」

健、隼也たちの姿を思い浮かべる。

健「俺にはそんな経験ないから羨ましかった」

舞花、もどかしそうに返答。

舞花「そう、なんだ……」

牧師、そこで提案をした。

牧師「一緒に祈らないかい？ 気持ちだけでも共有したらスッキリするよ」

舞花「あ、はい」

一同、こうして祈る。

牧師「天におられる我らの父よ……」

× × ×

祈り終えるタイミングで健父が迎えに来る。

健父「今日もありがとね先生」

牧師「良いんだよ、それにようやく先に進んだ」

牧師、舞花を指し言う。

健父「舞花ちゃんだっけ、ありがとね」

舞花「い、いえ……」

健父「今日は遅いし送ってくよ」

舞花「え、いいですっ」

健父「いいから、遠慮しないで」

舞花、そのまま健父の車へ。

○健父の車・（夜）

健父、舞花に家の場所を聞いて運転。

健は爆睡している。

健父「意外と家と近いな」

舞花「そうなんですネ」

健父、息子が寝ているのを確認し語る。

健父「ウチなあ、健が母さんと上手くやれな

くて家を出てっちゃったんだ」

舞花「え……」

健父「最初は分かってなかったけど段々成長する内に自分のせいなんじゃないかって気付き出して……」

舞花、バックミラーに映る健父の表情を伺う。

健父「そっからだ、人と関わるのを怖がり始めたのは……」

健父、改めてお願いをする。

健父「だからようやくって感じで嬉しいんだ、コイツの事よろしく頼むよ」

舞花、複雑な表情を浮かべている内に車は家に着いた。

○団地・舞花の家・（夜）

舞花父と舞花母、家で喧嘩をしている。

舞花父「お前がマトモにはたけられないから生活が苦しいんだろ？」

舞花母「私だって好きで働けないんじゃない

わよ！」

舞花、そのやり取りを無視した。

○高校・教室・（日替わり朝）

舞花、健係の日々を送る。

席が隣になりくつつけられ、勉強をつ

きつきりで見ている。

舞花「ホラ集中切れてる！」

健「あぁっ」

健、舞花の声で目を覚ます。

× × ×

昼休み、舞花は女友達と弁当を食べる。

そこに健はいない。

女友達「昼休みはアイツいいの？」

舞花「別に授業聞かせるだけだから、アンタ

らとの時間も欲しいし……」

女友達「でもこっち見てるよ？」

健、羨ましそうに舞花たちを見ている。

健「あの、俺も一緒に……」

舞花「ええ……？」

舞花、少し考えて決断する。

舞花「はあ、分かったよ」

× × ×

健、舞花に嬉しそうに話している。

健「そんで牧師さんと父さんがあ！」

舞花「また口に入れたまま……」

健「んんっ……」

女友達、2人の様子を見る。

女友達「何か良いコンビじゃない？」

舞花「え、どこが？」

健は微笑んでいた。

女友達「じゃ、邪魔しちゃ悪いし私はどっか

行くね」

舞花「え、待って……」

女友達、去ってしまう。

舞花、寂しそうに手を伸ばした。

○同・教室・（日替わり朝）

健、授業で正解する。

担任「おおよく正解したな」

健「へへっ」

健、舞花を見て笑う。

しかし舞花は笑っていない。

女友達「マジでやば」

男友達「俺テスト無理だわー」

舞花、楽しそうな友人を羨ましそうに見る。

担任「このまま午後の小テストも頑張れよ」

担任、健と舞花を交互に見た。

○同・教室・

数学の小テストの時間だった。

健、集中して取り組む。

舞花、健の姿と友人たちの姿を交互に見ていた。

○同・カウンセリング室・（日替わり）

牧師、放課後に健の小テストの結果に喜ぶ。

牧師「こんな点数獲ったの初めてだろ！」

牧師、健の頭を強く撫でる。

健「うわーやめろー」

健、そう言いながらも笑顔だった。

舞花、無表情で眺めている。

牧師、そんな舞花にも笑顔を向けた。

牧師「君のお陰かな、ありがとね！」

舞花「まあ確かに……」

牧師「見た目もスッキリしたしな！」

健「だって臭いって言われたから……」

舞花、健をジッと見つめている。

舞花「隼也が戻るまで、ね」

舞花、独りで呟いた。

○団地・舞花の部屋・（夜）

舞花、ベッドに転がりスマホを見る。

以下、画面上で

×

×

×

女友達「部活の終わりに遊んできたよ！」

男友達「プリ撮ったから送るわ」

×

×

×

舞花、グループチャットに送られた画像を見て唇を噛む。

○同・教室・（日替わり朝）

隼也、松葉杖について登校。

隼也「よお」

男友達、隼也に駆け寄る。

男友達「もう退院したの！でも試合は……」

隼也「流石に完治は間に合わねえな……」

隼也、舞花を見つける。

隼也「おお舞花、来たぜ」

舞花「あれ、早かったね……」

隼也「何だよりアクション薄いなあ」

健、そこで登校し舞花の隣に座る。

健「あ、えっと……」

健、隼也を見てうろたえる。

隼也「おいおい、何で隣に座るんだよ」

舞花「ここだけ席替えしたの」

隼也「他は変わらないのに？」

舞花「私、彼のお世話係だから……」

舞花、隼也と健の顔が見れない。

隼也「はあ？ 何で舞花がお前なんかの！」

健「うう……」

舞花「でも隼也が戻るまでって約束だからっ」

担任、そこでも入ってくる。

担任「お前ら座れー、隼也、席変わったのそ

こだけだからな」

隼也、担任に反発する。

隼也「今俺が戻るまでって言ってたんすけど」

担任「そうなのか？ 俺は聞いてないな」

担任、少し考えて言う。

担任「とりあえず今日はもう授業始まるから

後で考えよう」

隼也「ええ、マジかよ……」

× × ×

席はそのまま授業が始まる。

健「んっ、んんー」

舞花「それ抑えて」

健「はい……」

舞花、健係の仕事は続けている。

隼也、その様子をジッと見ていた。

○同・教室・（朝）

隼也、移動教室の準備をする。

隼也「あっ……」

隼也、松葉杖をつきながら教科書等を持てず落として転んでしまう。

男友達、隼也の教科書等を持つ。

男友達「大丈夫か、持つよ」

女友達、転ばないように支える。

女友達「立てる？」

隼也「ありがとう」

隼也、立ち上がるが舞花と健が一緒にいるのを見つける。

舞花「ノート持った？」

健「これ」

舞花「それ妄想日記でしょ？　こっち！」

隼也、舞花と健を睨んだ。

○同・玄関・

隼也、男友達と女友達に支えられながら放課後に玄関まで向かう。

舞花「あ……」

舞花、一瞬隼也を見るがすぐに健の方に向き直り健とカウンセリング室へ。

隼也「なあ、結局アイツの係のままじゃん」

女友達「そうだね、先生話してくれなかった」

男友達「その方が楽だからだろ、現に授業中

静かになったし」

隼也「でも舞花は俺の彼女だ、何で助けが必要な時にまであんな奴の……」

女友達、校門の前に停まる車を見つける。

女友達「あ、お母さん来たよ」

隼也「チッ」

隼也、そのまま母の車で帰る。

○同・カウンセリング室・

舞花、健と牧師の話を聞いているとスマホに隼也からのメッセージが届いている事に気付く。

以下、画面上で

× × ×

隼也「お前は俺の彼女なんだからな」

× × ×

舞花、そつとスマホをポケットに仕舞った。

○同・教室・（日替わり朝）

舞花、隣の健に話しかけられない。

健、妄想日記を書いていた。

隼也、妄想日記のノートを取り上げる。

隼也「おいまだやってんのかよ、どれどれ？」

隼也、妄想日記を読み上げる。

隼也「『父さんと母さんが仲直りして試合を

見に』ってまだ途中じゃねえか」

隼也、勝手に続きを書き足す。

男友達、それを笑って見ていた。

隼也「『来てくれたけどお母さんの不倫相手が来てて修羅場に』はは、ウケる！」

男友達「おいおいやめてやれって、どんな事情あるか分かんないだろ？」

男友達、笑っている。

健、目に涙を浮かべている。

舞花、流石に隼也に注意した。

舞花「隼也、やりすぎ……」

隼也、舞花に問う。

隼也「おいおい、彼氏の味方してくんないのかよ」

隼也、そのまま妄想日記を教室の水槽に投げ入れる。

健「ああっ！」

健、一瞬立ち上がるが座り込んでしまう。

隼也「朝から体育かよ、さっさと行こうぜ」

隼也、教室を出ていく。

舞花、健と隼也を交互に見ていた。

○同・体育館・（朝）

健、バスケットで敵である男友達からボールを受ける。

男友達「ホラ、決めてみろよ」

健、挑発に乗って突っ込んでいく。

男友達、簡単に避けボールを奪う。

健、勢い余って転んでしまった。

隼也、見学席から声援を送る。

隼也「いいぞー」

健、俯いて立ち上がれない。

男友達、それを責める。

男友達「おい邪魔だ、せっかく楽しんでるのに雰囲気壊すなよ」

健、そのまま動けず遂に飛んできたボ

ールにぶつかってしまふ。

健、更に蹲ってしまった。

舞花、見ていたが動けなかった。

○同・教室・

放課後、帰り始める生徒たち。

健、舞花の隣で俯いている。

舞花、健をチラチラと見ている。

隼也、そこへやって来る。

隼也「よお舞花、俺ん家まで来ないか？」

舞花「え、車じゃないの……？」

隼也「母さんに乗せてってもらうんだよ、いいだろ？」

舞花、健を見て言う。

舞花「えっと、この後カウンセリング室に……」

隼也「コイツとか？ 何で俺よりソイツ選ぶんだよ、彼氏は俺だぞ？」

男友達と女友達、集まって来る。

男友達「おいおい、流石に隼也が可哀想だろ？」

女友達「せっかく退院して来たのに構っても
られないとね……」

舞花、健を見ると健も舞花を見ていた
事に気付く。

舞花と健、目が合ってしまう。

健「舞花さん……」

舞花、齒を食いしぼる。

女友達「元々隼也が戻るまでって話だったじゃん。何、まさか好きになっちゃった？」

男友達「え、そんな事ある？」

舞花「え、そういう訳じゃ……」

舞花、否定してしまうが健の目を見て

言葉を止める。

隼也「否定しないって事はそうなのか？」

舞花「え、いや……」

隼也「俺の彼女ならちゃんと否定してくれよ」

舞花、隣の健と目の前の隼也を交互に見る。

舞花「私は……」

舞花、遂に答える。

舞花「いいよ隼也、行こう」

舞花、立ち上がり隼也を選ぶ。

健の顔は見ていなかった。

隼也「よっしゃ、そう来なくちゃ！」

隼也、舞花の背中を叩き共に教室から去ろうとする。

健、舞花の腕を掴む。

健「待ってよ舞花さんっ！」

舞花、齒を食い縛りながら健を振りほ

どいた。

舞花「ねえ、アンタのせいで友達と全然遊べなかったの」

健「あ……」

舞花「ようやく戻れると思ったのに邪魔しないで」

健「っ……」

健、走って教室から飛び出す。

その際舞花たちの前に割り込んだ。

舞花「わっ」

隼也「まったく、危ねえな……」

舞花、一瞬健の方を見たがすぐに隼也へ向き直り彼に着いて行った。

○隼也母の車・

舞花と隼也、隼也母（34）が運転する車の後部座席に座る。

舞花「すみません、私も乗せてもらっちゃって」

隼也母、隼也に文句を言う。

隼也母「何でこんなにアンタのわがまま聞かなきゃいけないのよ、ただでさえアンタの怪我で仕事抜け出さなきゃいけないのに」

隼也「怪我は俺のせいじゃねえっつーの」

隼也母「はあ、しかも私の苦勞なんか知りもしないで女なんか連れ込もうとして」

隼也母、バックミラー越しに舞花を睨む。

隼也母「夜に彼氏来るから早めに帰ってね」

○アパート・隼也の部屋

舞花、汚いアパートの狭い隼也の部屋で布団の上に座る。

床には黄ばんだティッシュが散らばっていた。

隼也母、ゴミの散乱した居間で寝る。

隼也「母さんいるけど久々だよな、こうして

家来てくれたの」

舞花「うん……」

隼也、汚い部屋を眺める舞花を見て思
い切り抱き着く。

舞花「ちよっ、何？」

隼也「もう我慢できねえ」

隼也、舞花を抱き締めたまま布団に倒
れこむ。

隼也「もう試合もダメになっちまった、だか
らいいだろ？ 慰めてくれよ」

隼也、舞花の胸に顔を埋め匂いを嗅ぐ。
舞花、隼也を突き飛ばし起き上がった。

舞花「やめてよっ！」

隼也、足を押さえた。

隼也「いってえ！ 何すんだよ！」

舞花、隼也に溜まった思いをぶつける。

舞花「前から思ってた、私と付き合ってるの
って都合よく慰めてくれるからでしょ？ 体
だけが目的っ」

隼也「お前だって俺の立場だけが目的なんだ

ろ？ 何回告っても振ったのにサッカー部のエースになった途端に〇×して！」

舞花「それはっ……」

隼也「俺の足がこんなになったから、活躍できなくなったから違う男のところ行ったんだろ？ なぁ？」

隼也、また舞花に迫る。

隼也「治ったらまたやれるからさ、見捨てないでくれよ！」

舞花、立ち上がり隼也を拒絶する。

そのままアパートを出ようとした。

隼也、去る舞花に叫ぶ。

隼也「そんなにアイツがいいのか！ 俺と別れたら立場終わりだぞ！ 俺が皆と繋げてやったんだ！」

隼也母「うるさいっ！」

舞花、隼也と隼也母の怒号を無視しアパートを飛び出した。

○学校・グラウンド・

男友達、校舎に戻る舞花を見つける。

男友達「マジかよ」

男友達、スマホを取り出した。

○同・カウンセリング室・

舞花、扉の前に立つが中から声が聞こえて立ち止まる。

健、牧師に向かって嘆いていた。

健「何で俺ばっかこんな辛いのか！」

牧師、何も言わない。

健「神様がいるんならきつとサンドバッグにするために俺を作ったんだ！　すぐ死なないように平和な日本で苦しめて笑ってるんだ！」

牧師「神の存在を感じたのかい？」

健「そうだよ、最悪な神様がいるんだ！」

牧師「健、それは違う。神は皆平等に愛しておられる」

健「じゃあ何で辛いのか？」

牧師「試練を与えてるんだ、それを乗り越え

たとき人は神の愛を知る」

牧師、健の肩に手を置く。

牧師「大丈夫、君は確実に試練を乗り越えて
るよ、もうすぐ結果は現れるはずだ」

舞花、そこで扉を開き現れる。

健「舞花さん……？」

牧師「ほらね」

舞花、健に近付き謝る。

舞花「ごめんなさい。私、自分の事しか考え
られなかった」

健、少し俯く。

舞花「一緒に帰ろ？ 私はそうしたい」

○通学路・

舞花と健、一緒に歩く。

舞花、自分の事情を話した。

舞花「私ね、君が憧れるようなキラキラした
人じゃないの。私の方がそんな世界に憧
れてた」

健「そうなんですか……？」

舞花「そんな時に隼也が告白してきた、でもそんな凄い奴じゃなかったから断ってた。そしたらいつの間にかサッカーでエースになってて、ここで〇×したら私も一軍にいけると思って付き合ってたんだ」

健、下を向いてしまう。

舞花「友達も出来て楽しかったけど隼也は体ばかり求めて。全然満たされなかった、表面的な付き合いでしかなかったよ」

舞花、健の顔を見て告げる。

舞花「だから私は君が羨ましい。優しいお父さんがいて想ってくれる牧師さんがいて。私にないものを君は持ってる」

健、思わず顔を上げてしまう。

舞花「多分明日から私は独りになるけどもし君が良ければ……」

健、すぐに返事をした。

健「もちろんです！ でも舞花さんは一つ勘違いをしています」

舞花「どんな？」

健「舞花さんの事を想ってる人はいます、俺がそうです！」

舞花、瞳が潤んでいた。

舞花「はは、そうだったね！」

健「やっと笑ってくれた！」

健、舞花の周りを飛び跳ねる。

舞花、そんな健を見て微笑んだ。

○団地・舞花の家・（夜）

舞花が帰宅すると舞花母が駆け寄る。

舞花母「舞花！」

舞花「どうしたの嬉しそうにして？」

舞花母「お父さんがね、逮捕されたの！」

舞花「え……？」

舞花母「飲酒運転で人轢いたって！ 私達の

事は登別の婆ちゃんが面倒みてくれるって

さ！ ようやく解放される！」

舞花、舞花母と対照的に絶句した。

○学校・教室・（日替わり朝）

朝のホームルーム、舞花と担任が前に立っている。

担任「突然ですが清水舞花さんが転校する事になりました」

教室内、リアクションが薄い。

隼也、頬杖をついて欠伸をした。

男友達と女友達、ヒソヒソと話す。

担任「あと一週間、仲良くしてやってくれ」

健、目を見開いていた。

× × ×

舞花、ホームルームが終わった教室で一人座っていた。

舞花、隼也が男友達と楽しそうにしているのを見つめる。

隼也「トイレ行くから手伝ってくれよー」

隼也、舞花の視線に気付くが無視。

舞花、俯いている。

健、そこで舞花に話しかけた。

健「あの、舞花さん……？」

舞花「あ……」

○同・カウンセリング室・

放課後になった。

まだ牧師の姿のないカウンセリング室。

舞花と健、2人きりで話す。

舞花「覚悟はしてたけどね、いざ無視されると悲しいな」

健「本当に転校しちゃうんですか……？」

舞花「うん、仕方ないよ。流石に一人暮らしさせてもらうお金はない」

健「そんな……」

舞花、健の背中を優しく撫でる。

舞花「でも心配だよね。私達独りになって上手くやれるかな？」

健「俺、舞花さんがいてくれたから少しだけ自身が持てた。いなくなっちゃったら……」

健、どんどん声が小さくなる。

舞花、健の肩に頭を乗せた。

健「え……？」

舞花「少しだけ……」

舞花、無言で健の肩に頭を乗せている。

健、顔を赤くしながらただ前を向く。

舞花、しばらくして立ち上がった。

舞花「うん、ありがと。じゃあ引っ越しの準備あるから行くね」

健「はい……」

舞花「これだけ渡しとく」

舞花、以前隼也により水槽に投げ込まれた妄想日記を渡す。

健、中身を確認するが文字は滲んでおり上手く読めなかった。

舞花「じゃあね……健っ」

舞花、初めて健の名を呼び去った。

○同・教室・（日替わり朝）

健、チックを抑えながら授業を受ける。

ちゃんとノートをとっていた。

健「んっ……っ」

健、隣の席を確認したが空席。

○同・カウンセリング室・

健、牧師と舞花の心配をしていた。

牧師「転校まで来ないつもりなのか……」

健「そんなの嫌だよ……っ」

健、少しチックが強くなっている。

牧師、机に置かれたふやけた妄想日記を指す。

牧師「それ、まだ持ってるのかい？」

健「だって不安だから……」

牧師「ずっと心の支えにしてたもんね」

牧師、舞花との事を語りだす。

牧師「そいえば舞花さんと話してる間君はそれ書かなくても元気だったよね」

健「確かに苦しくなかった」

牧師「何でだと思う？」

健「それは……っ」

健、歯を食いしばる。

牧師「分かってるんでしょ？」

牧師、聖書を手に取る。

牧師「前教えた言葉、覚えてる？」

健「確か『敵のために祈れ』みたいなの……」

牧師「そうそう、今の君はその意味に気付きつつあると思うんだ」

健「どういう事？」

牧師「舞花さんと関わって少し他人に対する怖さが克服できたんじゃないかな？ 敵だと思ってた他人と関わって自信がついたんじゃない？」

健「お、俺……」

健、チックが収まっていた。

健、拳を強く握る。

健「大丈夫かな、みんな嫌がらないかな？」

牧師「大丈夫さ！ 君が変わればみんなにそれが伝わる、舞花さんがそうだっただろ？」

健「うん……！」

健、立ち上がった。

○同・教室・（日替わり朝）

隼也、男友達と女友達と話している。

隼也「3年の試合では上手くやるさ！」

健、そこにやって来る。

健「あ、あの……隼也君……」

隼也「あ？ んだお前、何の用だ？」

健、勢いよく頭を下げる。

健「ごめんなさい！」

隼也、目を見開いた。

隼也「どういう事だよ……？」

健「足怪我させちゃって……試合出れなくっ」

隼也、齒を食いしぼり答える。

隼也「……うるせえよ」

隼也、振り返り健に背を向けた。

しかし健、大人しく席に座った。

隼也、その顔は苦しそうだった。

○健父の車・（週変わり朝）

週が変わった朝。

健と健父、車に乗っていた。

健父「近いからすぐ着くぞ」

健「うん……！」

○団地・入口・（朝）

引越し業者が行き交う団地の入口に

舞花は立っている。

舞花母「もう準備できたの？」

舞花「うん……」

舞花母「じゃあ私達は先に行こうか」

舞花母、車のキーを持つ。

舞花、着いていこうとした。

舞花、ある声を聞いて振り返る。

健「舞花さあーん！」

健、妄想日記を片手に走る。

舞花「え、ウソ！」

舞花、口を両手で押さえた。

健、立ち止まり息を切らす。

健「はぁ、はぁ……間に合った」

舞花「何で……？」

健「どうしても伝えたい事があって」

健、舞花に向き直り語る。

健「俺、舞花さんがいなくても頑張りますっ、
何とか友達作るから……舞花さんも頑張っ

て下さい！」

健、入り口前のゴミ箱に向かう。

健「これももういりません！」

健、妄想日記をゴミ箱に捨てた。

舞花「え、いいの……？」

健「はい、理想は自分で掴みます！　なんて」

舞花、思わず笑みが零れてしまう。

健「でも舞花さんの事は忘れませんよ！　会

える時は会いましょう！」

舞花、涙が溢れた。

舞花「うん、うんっ！　私も頑張るっ」

舞花、涙を拭い答えた。

舞花「そしたらお互いの友達見せあいっこし

よ？」

健「はい！」

健、笑顔で舞花を送り出す。

健「それじゃ舞花さん、いってらっしゃい！」

舞花、優しく微笑んだ。

T『きっかけ』

(了)